

校 友 會 誌

第 四 十 三 號

昭 和 九 年 二 月 十 一 日 發 行

滋 賀 縣 立 彥 根 中 學 校

彦根中學校々歌

湖への春にかざられて
雲ふきはらふ臆吹山
ふもとの若葉あたらしく
われらが園はかがやけり
緑しづけき學びやに
智徳のとはそ啓きつゝ
明はなれゆく人の世の
われらが窓に光あり
不撓の決意と力行の
わかき生命にまもられて
幸とほまれに美はしく
われらが園はかがやけり

剛健自助の門によりて
湖畔のまもり嚴かに
たてる金龜の學びやの
ああほまれある幾春秋
金剛不壞のこゝろもて
つとめ勤しむ森のかけ
われが窓の燦爛と
ああほまれある幾春秋
天のかがやき地に享けて
こゝろ澄みたる琵琶の湖
金龜の春とこしへに
われらが園は新たなり

謹んで

皇太子殿下の御降誕を壽ぎ奉る

彦根

奉 祝

足 立 芳 之 助

昭和八年十二月二十三日午前六時三十九分 皇太子殿下御降臨あらせらる。齊祥窮り無く國燦々固し。洵に恭悦の至りに勝へず。謹みて賀し奉りて

天つ日の日嗣の皇子や日の光り
貴の御子生れまして冬の空は晴れ
國難も今はものは斯の慶事
祝ぎ祝ぎて祝ぎまつらばや御民われ
國旗 國旗 國旗 われらが日の皇子

校友會誌 (第四十三號) 目次

校 歌	足立芳之助
奉 祝	足立芳之助
口 繪	新講堂及作業教室
	第四十六回卒業生
國民精神作興詔書御下賜十八年	學校長 足立芳之助(一)
特別記事	
感謝のことば	足立芳之助(二)
國民精神作興詔書謹解	足立芳之助(三)
非常時特輯	
現時局に對する吾人の覺悟	五年 大森 德三(二五)
非常時に直面して	森瀨 市郎(二六)
理想の下に邁進せよ	千秋(二九)
彦中生として	四年 居長 賢藏(二)
國民精神作興詔書煥發十週年を迎へ奉りて	西島 輝夫(三)
國家非常時にあたり日本青年に勵す	細野徳太郎(三)
非常時日本と我等の覺悟	三年 安藤 權一(三四)
現代我國の情勢と我等の覺悟	林 秀夫(三五)
非常時に際して	二年 的場 俊(二六)
非常時に直面して	望月 實(二七)
非常時の二年生	圓城 茂平(二九)
彦中應援歌	(三〇)
◇論 說	
歐米視察漫談(速記)	矢野 貫城(三)

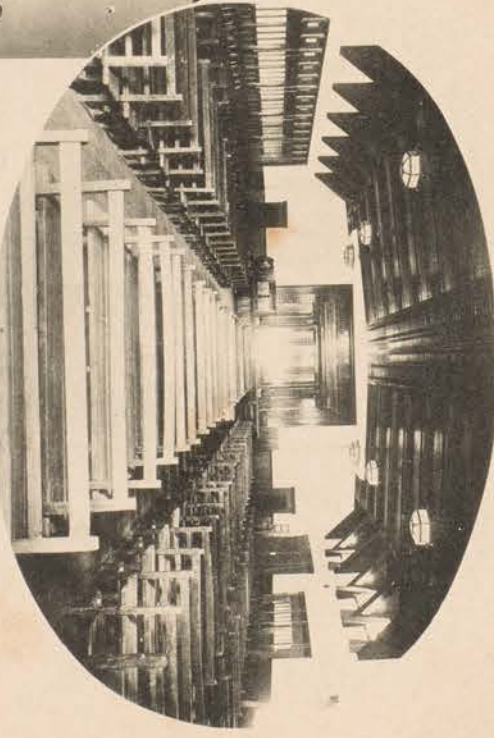
生活を開ひとるの道	特別會員 尾田鶴治郎(七)
兵營生活諸感	五年 大原 一夫(四二)
亞細亞を守れ	山田 惠一(四四)
皇道精神を以て滿洲國に激め	小野 豊久(四五)
曙の輝明を求めて	北村 辰夫(四六)
青年よ雄飛せよ	四年 藤關平三郎(四七)
行け滿洲へ	三年 上村文太郎(五〇)
文明が生むもの	馬場 俊馬(五一)
慈によつて生ずる物	松村 惠喜(五二)
◇研 究	
科學玩具及びその應用に就きて	五年 井上八右衛門(五三)
滋賀縣下に於ける蕪藩の所在地に就いて	柴田 良治(五四)
江州音頭の起原と其意義	四年 吉田 龍性(五六)
鳴く虫の話	三年 伊吹 義雄(五七)
伊吹山の野生藥草	一年 狩野 武(五八)
◇文 苑	
飛行機搭乗記	あだち(六〇)
寂しい木犀	五年 齋藤 萬衛(六一)
閑 語	松橋 均五(六二)
思ひ出を残して	馬場 弘一(七〇)
戦敗れて!	丸岡 芳之(七二)
いてふ	橋本 末藏(七五)
近江舞子にて	丸岡 芳之(七六)
鷗日記	四年 西島 輝夫(七八)

山の日出、海の日出	三年	安藤 権一(七九)
御來迎	林 秀夫(八八)	
夜寒	林 榮一(八二)	
暮れて逝く秋	井上 惣重(八三)	
秋の頃	松山十三雄(八四)	
馬蹄の響	伊藤 芳男(八六)	
夜	蘭部 智彰(八七)	
或日の學校	一年	大橋壽貞雄(八八)
朝の彥根	齋藤 輝六(九〇)	
折られた鉛筆	西關 藤一(九一)	
防空演習の日	中川敬一郎(九三)	
虫	木村 昌太(九三)	
十五夜	北村 忠夫(九四)	
◇詩		
秋の温泉行	五年	齋藤 數衛(九五)
五月の歌	羽根田辰男(九五)	
心のまゝに	橋本 末藏(九六)	
別れを想ふ	田中 一雄(九六)	
ヨットに乗りて外一篇	大原 一夫(九六)	
滅	丸岡 芳之(九六)	
母校	小野 豊久(九七)	
卒業せられる人に	四年	藤開平三郎(九七)
幼なき日外一篇	西島 輝夫(九八)	
日の本の民	三年	保藤 義三(九八)
秋の夕	石田 一夫(九九)	
路傍の秋	浅野 實誠(九九)	
小さな島	岡庭 益男(九九)	

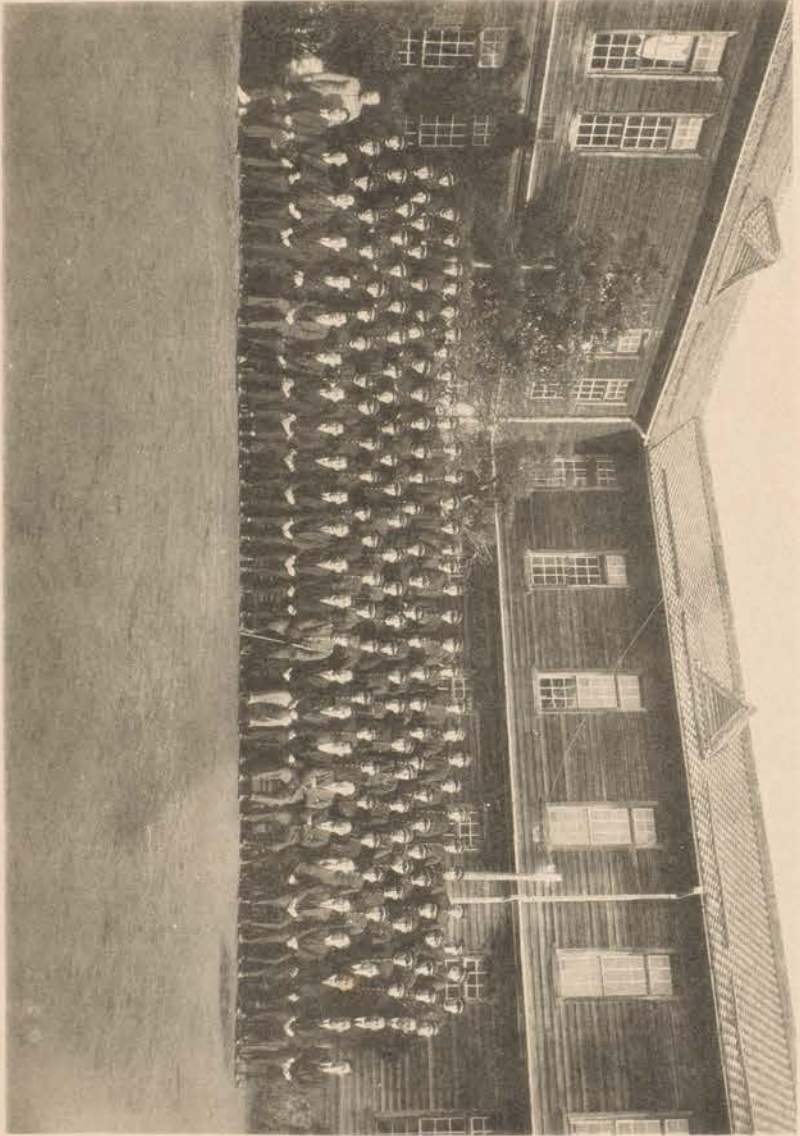
親友よさらば	杉山十三雄(一〇〇)	
思ひて	一年	杉本 寛(一〇〇)
◇短歌		
非常時日本	特別會員	平井 乙麟(一〇一)
蜘蛛	特別會員	藤田 一一(一〇二)
雑詠	五年	羽根田辰男(一〇三)
雑詠	五年	田中 一雄(一〇三)
◇俳句		
聯合演習参加の記	修學旅行記	(一〇五)
◇消息		
母校に稿す	卒業生	滿島 啓二(一一九)
湖國に於けるボォーリス氏苦闘史	卒業生	淺島 希一(一二〇)
◇各部部報		
劍道部	(一一)	
柔道部	(一四)	
端艇部	(一五)	
野球部	(一三)	
庭球部	(一七)	
水技部	(一七)	
水泳部	(一七)	
◇雜錄		
學校日誌抄	(三七)	
昭和八年度校友會各部役員	(四〇)	
會計報告	(四一)	
編輯後記	(四二)	



室 教 業 作 の 成 新



堂 講 新 る せ 成 竣



第 四 十 六 回 卒 業 生

國民精神作興詔書御下賜十年

學校長 足立芳之助

「非常時局」。何たる恐ろしい言葉であらう。然るを世の人、之を耳にして平然たるは、更らに恐るべきである。内に備へ
のあつてであらうか。はた認識不足のためであらうか。

之を國內的に觀る。思想の歸一が見出し得るか。經濟の安定が保せられてあるか。之を國際的に觀る。彼我の間認識の正し
きものがあるか。正義の大道が守られてあるか。隣邦支那の混亂、ソヴェト聯邦の極東政策、米國の建艦、英國の經濟政策
等等考量し來る時、國際聯盟離脱の効力の發生する昭和十年（一九三五）、或は第二軍縮條約滿期の昭和十一年（一九三六）
前後に於いて、皇國の一大危機に直面するなきを、誰かよく保證し得よう。

然り、我等の當に一大覺悟を要すべきは、實にこの點に存するのである。我等は飽くまで戰爭は回避すべきだ。第一は外交
工作に依つて。第二は國民の協力一致、他の乘すべき隙を與へないことに依つて。而して萬一戰爭となれば、我等は必勝を期
すべきのみだ。第一は忠勇無二なる皇軍の力に依つて。第二は國民の戮力一心、忘私護國の働きに依つて。而かも外交工作と
いひ、皇軍の活動といふも、背後國民の支持援護を俟つて始めて十全を期し得るもの。且つや國內の思想、經濟等等問題の解
決、一つとして國民各自の自覺に俟たないものはないことを想ふ時、非常時局打開の鍵は、乃ち我等國民銘々の手中にあるを
知るのである。國民銘々とは「我」を措いて他にあらう筈はなく、然らば皇國前途の萬難を克服して「日本精神」を宇内に發
揚することこそ、我に課せられたる最高の任務ではないか。

時恰も國民精神作興に關する 詔書御下賜十年に當る。謹みて之を奉讀し「今ニ及ヒテ時弊ヲ革メスムハ或ハ前緒ヲ失墜セ
ムコトヲ恐ル」の條下に至れば、そぞろ落涙を禁じ得ない。大御心を拜察し奉つて、洵に恐懼の至りに堪へないのである。時
局刻々に重大性を加重するの秋、本校職員生徒相率る相勵まし、只管 聖旨を奉體し、決死奉公、以て「臣子の分」を全うせ
んことを誓ひ奉る。

感謝のことは

— 新講堂の竣工に際し —

できるかぎり経費の節約を圖らなくてはならぬときに

特別のおはからひによりまして

かうした善美なる講堂を新にたてていただき

武道も剣柔別々の道場で修行ができるやうになりましたことは

言葉ではいひつくせない慶びでありまして

ここに衷心より感謝の意を表する次第であります。

昭和八年六月一日

學校長 足立芳之助

校友會誌 第四十三號



特別記事

國民精神作興詔書謹解

足立芳之助

朕惟フニ國家興隆ノ本ハ國民精神ノ剛健ニ在リ之ヲ涵養シ之ヲ振作シテ以テ國本ヲ固クセサルヘカラス

「朕」は天皇の御自稱、我の義である。

「惟フ」は思ふの義、深く考へてみることである。

「國家」は最高の組織的社會をいふのである。

「興隆」はおこり立つて勢の盛んになることである。

「本」は根本の義、本づくところをいふのである。

「國民精神」は國民の精神、詳しくいへば國民全體に遍在してゐる精神といふことである。「國民」は國家を組織してゐる人民のこと。「精神」はこころの義、意氣、たましひと通じるものがある。

「剛健」の「剛」は堅強にして屈せざるの意、私欲私情の奴隸となることのない正しく強き心の力をいふ。「健」は強くして力あること、著々各々が分を盡すに十全の力を發揮するのをいふ。「剛健」は正しいことに強くしつかりとしてゐること、即ち國家本然の面目を發揮してその理想を實現する精神力の旺盛なることである。

「在り」は存すといふことである。

國家の興隆する根本は國民精神の剛健なることに存すると仰せられたのである。萬難に打ち克つて國家の理想を實現せんと勇躍する國民の剛健なる精神力が國家興隆の基礎であるとの意であらう。

「之ヲ涵養シ」は國民精神をよく育て養ふことである。「涵養」は水を與へて草木を養ふことより轉じて化育修養の義となつたものである。

「之ヲ振作シ」は國民精神を振ひ興すことである。シンサクと訓む。

「國本」は國家の根本といふことである。

「固ク」はかためる義、堅固なものにすることである。

國民精神を涵養し振作して國家の根本を堅固なものにせねばならぬと仰せられたのである。

是ヲ以テ先帝意ヲ教育ニ留メサセラレ國體ニ基キ淵源ニ遡リ皇祖皇宗ノ遺訓ヲ掲ケテ其ノ大綱ヲ昭示シタマヒ後又臣民ニ詔シテ忠實勤儉ヲ勸メ信義ノ訓ヲ申ネテ荒怠ノ誠ヲ垂レタマヘリ

「是ヲ以テ」はそれでといふことである。

「先帝」は先代の天皇、此處では明治天皇の御事である。

「教育」は人を教へ導きて完全な人格に至らしめることである。

「意ヲ：：留メサセラレ」は心を注ぐ義、大御心を御傾倒あそばしたることである。

このゆゑに明治天皇は大御心を教育に御傾注あそばしたと仰せられたのである。國民精神を涵養振作して國本を固くしなくてはならぬから教育の振興を御圖りあそばしたのであつて、教育の究極の目的は國民精神を振興して國運の隆昌を圖るにあると拜察されるのである。

「國體」は國家の體様、國柄、國性などいふ義である。

「淵源」は基づくところの義、事の本原、大本を指すのである。「國體ニ基キ淵源ニ遡リ」は教育勅語の「我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ：：：教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス」をさし給うたのであらう。

「皇祖皇宗」は皇室の御祖先の御方々といふことである。

「遺訓」は後世に御遺しになつた御教訓といふことである。「皇祖皇宗ノ遺訓」とは教育勅語の「爾臣民父母ニ孝ニ：：：皇運ヲ扶翼スヘシ」をさし給うたのであらう。

「其ノ」は「教育」をうけるのである。

「大綱」は主要なる簡條の義である。

「昭示」は明らかに示すことである。

國體に基き淵源に遡つて皇祖皇宗の御遺訓を御示しになり國民の教育の大綱を明示あそばしたと仰せられたのである。これは教育勅語のことを仰せられたのであらう。「父母ニ孝ニ」以下教育の諸要綱が「以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ」といふことで一括せられてあるから、凡百の教育は「皇運扶翼」に歸一すべきものなることを忘れてはならぬ。「詔シテ」は御告げになつてといふことである。

「忠實」の「忠」はまごころ、「實」はまこと、内に物の滿ちてある義。「忠實」は内心の誠より出で行之之にかなふもの即ち眞面目に力を盡すことである。戊申詔書には「忠實業ニ服シ」と仰せられてある。

「勤儉」の「勤」は勤勉の勤、つとめいそしむ義、「儉」は節儉の儉、身をつつまやかにしてしまりある義。戊申詔書には「勤儉産ヲ治メ」と仰せられてある。

「信義」については軍人に賜はりたる勅諭に「信とは己が言を踐行ひ義とは己が分を盡すをいふなり」と仰せられてある。戊申詔書には「惟レ信惟レ義」と仰せられてある。

「訓」はオシへと訓む。御教訓のことである。

「申ネテ」はカサネテと訓む。重ねての義である。

「荒怠」の「荒」はすさむ義、「怠」はおこたる義。「荒怠」は物慾に迷つて己が分とするところを怠ることである。戊申詔書には「荒怠相識メ」と仰せられてある。

「誠」はいましめである。

「垂レ」は下さるの義である。

明治天皇はその後また臣民に詔を下し給うて忠實勤儉を勧め、信義の訓をかさね、己が務めを怠らぬやうにせよと御誠めあそばしたと仰せられたのである。これは戊申詔書のことを仰せられたのであらう。

是レ皆道德ヲ尊重シテ國民精神ヲ涵養振作スル所以ノ洪謨ニ非サルナシ

「是レ皆」は「先帝意ヲ教育ニ……荒怠ノ誠ヲ垂レタマヘリ」を指すのである。

「道德」は人のふみ行ふべき道を總括的にいつたものである。道德を行ふところに人の人たる價值が發揮される。

「洪謨」は天皇の大いなる謀の義である。

明治天皇が教育勅語を御下賜になつたのも戊申詔書を御下賜になつたのも、凡て道德を尊重して國民精神を涵養振作するための御はからひにほかならないと仰せられたのである。

爾來趨向一定シテ效果大ニ著レ以テ國家ノ興隆ヲ致セリ

「爾來」はそれよりこのかたといふことである。

「趨向」は心の向ふところといふ義である。

「一定」は一つに定ることである。

「效果」はききめの現はれた結果といふことである。

「著レ」ははつきりと見えることである。

それよりこのかた國民の心の向ふところが一定しその效果が大いにあらはれて國家の興隆をいたしたと仰せられたのである國民の心が同一方向にあるといふことが國家の興隆を招來する上に如何に肝要なることであるかといふことに思ひをいたさなくてはならぬ。

朕即位以來夙夜兢兢トシテ常ニ紹述ヲ思ヒシニ俄ニ災變ニ遭ヒテ憂悚交々至レリ

「即位」は天皇の御位に即きたまふことである。狹義にまをせば先帝の崩御によりてその後を繼ぎたまふを「踐祚」と稱し「即位」の禮はその後京都に於いて大嘗祭とともに行はせたまふこととなつてゐるのであるが、此處では廣義に解すべきであらう。

「夙夜」の「夙」はつとにの義、「夜」はよはにの義。「夙夜」は朝早く起き夜遅く寝ること、朝から晩までの意である。

「兢兢」は戒め慎む、恐れ謹むの義である。

「紹述」の「紹」はつぐ、「述」はのぶる。「紹述」は繼ぎて従ひのぶること即ちうけついで行ふといふことである。

『災變』は天災地變、わざはひの義。大正十二年九月一日の關東地方の大震災火災をさすのである。

『憂悚』の「憂」はうれへ、「悚」はおそる。「憂悚」は心配の義である。

『交々至レリ』はかはるがはる起り来る、しきりに起り来る義である。

即位以來日夕戒め慎んで先帝の御遺業を繼承して之を益々發展せしめようと思つてゐたのに俄かに災變にあつてしきりと心配したと仰せられたのである。災後間もなく發布せられた詔書には「朕前古無比ノ天殃ニ際會シテ郵民ノ心愈々切ニ寢食爲ニ安カラス」と仰せられてある。

輓近學術益々開ケ人智日ニ進ム然レトモ浮華放縱ノ習漸ク萌シ輕佻詭激ノ風モ亦生ス

『輓近』は近頃の世といふことである。

『學術益々開ケ』は學問技術の進歩の益々著しくなつたことである。

『人智日ニ進ム』は人間の知的方面の働きの日々に向上してきたことである。

『浮華』は上への飾りのみ美にして内實のないことである。

『放縱』はわがままなこと、勝手氣儘に振舞ひてしまりなきことである。

『習』はナラヒと訓む。ならばしのことである。

『輕佻』はかるはづみなこと、生意氣なことである。

『詭激』は常軌を逸した言行をいふのである。

『風』はその社會一般に行はれてゐることをいふのである。

近頃學術は益々開けて人智も日々に進んできたけれども、浮華放縱の習は次第に起り輕佻詭激の風も亦盛じてきたと仰せられたのである。

れたのである。

今ニ及ヒテ時弊ヲ革メスムハ或ハ前緒ヲ失墜セムコトヲ恐ル

『時弊』は現時の弊風の義である。「浮華放縱ノ習」と「輕佻詭激ノ風」とをさし給うたのであらう。

『革メ』は根本より變へて新にすることである。

『前緒』は前業の義、先帝の御傳へになつた御事業といふことである。

『失墜』はおとしてなくすることである。

今の中に現代の惡風を根本的に改めて置かないと先帝の御遺業を失墜するやうなことになるはしないかと心配であると仰せられたのである。かくまで聖慮を惱ませ給ふに至つたことについては、われら國民はその責任を感じなくてはならぬ。まことに恐懼の至りに堪へない次第である。

況ヤ今次ノ災禍甚タ大ニシテ文化ノ紹復國力ノ振興ハ皆國民ノ精神ニ待ツツヤ

『今次』はこのたびの義である。

『災禍』は災變より來れる不幸のことである。

『文化』は教化の普及進歩による物心兩面の文明情態をいふのである。

『紹復』は先業を紹ぎ興して再び盛んにすることである。

『國力』はあらゆる方面から見ても國家内の力をさすのである。

『振興』は振作興隆のことである。

ましてこのたびの災禍は非常に大なるものであるから文化の紹復も國力の振興もみな國民の精神によらなくてはならぬに於いては尙更さうであつて、この際斷乎として時弊を革めなくてはならぬと仰せられたのである。

是レ實ニ上下協戮振作更張ノ時ナリ

「上下」は上に立つものも下に居るものも皆の意、國家を組織してある全體の人々をいふのである。

「協戮」は協心戮力のこと、心をかなへ力をあはすこと、同心一體となつてといふことである。

「更張」の「更」は改、「張」は大、開の意。「更張」は改善して益々之を盛んにすることである。

現今は浮華放縱の習や輕佻詭激の風などの時弊が生じてきてゐるところに加ふるに意外の大變災が突發したことであるからこの二つの大艱難を突破せんがため、今こそは國民全體が同心一體となつて振作し更張すべき時であると仰せられたのである。

振作更張ノ道ハ他ナシ先帝ノ聖訓ニ恪遵シテ其ノ實效ヲ舉クルニ在ルノミ

「道」は方法といふほどの意である。

「先帝ノ聖訓」は主として教育勅語と戊申詔書とをさし給うたのであらう。「聖訓」はこの上もない尊い御訓といふ義である。

「恪遵」はつつしみましたがつことである。

「實效」は實際の効果をいふのである。

振作更張の方法といつても外でもない、明治天皇の聖訓に敬み循つてその實際の効果をあけるやうにすること、ただ斯の一事であると仰せられたのである。

宜ク教育ノ淵源ヲ崇ヒテ智徳ノ竝進ヲ努メ綱紀ヲ肅正シ風俗ヲ匡勵シ浮華放縱ヲ斥ケテ質實剛健ニ趨キ輕佻詭激ヲ矯メテ醇厚中正ニ歸シ人倫ヲ明ニシテ親和ヲ致

シ公徳ヲ守リテ秩序ヲ保チ責任ヲ重シ節制ヲ尚ヒ忠孝義勇ノ美ヲ揚ケ博愛共存ノ誼ヲ篤クシ入りテハ恭儉勤敏業ニ服シ産ヲ治メ出テテハ一己ノ利害ニ偏セスシテ力ヲ公益世務ニ竭シ以テ國家ノ興隆ト民族ノ安榮社會ノ福祉トヲ圖ルヘシ

「宜ク」は「教育ノ淵源ヲ崇ヒテ……社會ノ福祉トヲ圖ルヘシ」にかかるのである。

「教育ノ淵源」は教育勅語に「教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス」と仰せられた「淵源」をさすのであらう。すなはち天祖の肇め給うた君民一體、忠孝一如のわが國體をいふのであらう。

「崇ヒテ」は仰ぎて慕ひ重んずることである。「崇」は重、尙、尊の義である。

「智徳の竝進」は知識能力の方面も道德品性の方面もともに進めてその一方に偏ることなきの意である。教育勅語には「智能ヲ啓發シ徳器ヲ成就シ」と仰せられてある。

「努メ」は力を入れてはけむことである。

それで教育の大本を崇んで智と徳の竝進に努めと仰せられたのである。

「綱紀」の「綱」はおぼつな、「紀」はをさむ。「綱紀」は絲を理めて亂れざらしめることより國家統治の大綱を意味し、國家の法規法制の義である。

「肅正」はひきしめて正す義である。茲では法規の弛んで亂れようとするのをひきしまつて之を勵行することである。

「風俗」の「風」は上の化するところ、「俗」は下の習ふところ。「風俗」は世のならばしをいふのである。

「匡勵」の「匡」は正、「勵」は獎勵の勸、はけますことである。「匡勵」は正しうして勵ましつとめしめる義である。綱紀をひきしめて正しまた惡風俗を改めて良風俗を起してと仰せられたのである。

「斥ケテ」は排斥して、おしのけての意である。

「質實」の「質」は質朴の義、飾りなく真面目なこと、「實」はてがたく真面目なこと。「質實」はかざりなく、かたく、真面目で實のあることである。戊申詔書には「華ヲ去リ實ニ就キ」と仰せられてある。

「矯メテ」はゆがみたるを直すことである。

「醇厚」はてあつきこと、真面目にて浮き浮きした心のなきことである。

「中正」は一方に偏することなく正しきをいふのである。

「歸シ」はその當然あるべきところに至るといふ義である。

浮華放縱の悪習を斥けて質實剛健になるやうにし輕佻詭激の悪風を直して醇厚中正になつてと仰せられたのである。

「人倫」は人間の條理、人の道といふことである。人と人との關係からみたものである。

「親和」は親しみやはらぎて睦じく暮らすことである。

「公德」は社會公共の生活に關する道德をいふのである。

「秩序」は物事の筋道の正しく整へること、物事に順序次第のあることをいふのである。

「責任」は事を擔任してその責を負ふことをいふのである。

「節制」は竹にふしある如く人の行動にしまりあるをいふのである。

人の人たる道を明かにして之に違ふことなく相互に睦じく暮らし、社會公共の道德を守りてその秩序を維持し、自己の責任は徹底的に之を全うすることを努め、節制ある行動を爲してと仰せられたのである。

「忠孝」の「忠」は誠の心をもつて天皇に事へることである。「孝」は誠の心をもつて父母に事へることである。父母の中には祖先も含まれてゐる。わが國では孝は忠に歸一する。教育勅語には「克ク忠ニ克ク孝ニ」と仰せられてある。

「義勇」は義より出でたる勇氣、正しき道による勇氣をいふのである。教育勅語には「一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ」と仰せられてある。

「美ヲ揚ケ」は美風を發揚することである。美の中には善の意も含まれてゐる。

「博愛」は博く世間の人に慈愛を及ぼすことである。自己を擴充してゆくと他人も自己の中に包含せられるやうになつてくる。かくて終には人類一般にも及ぶに至る。教育勅語には「博愛衆ニ及ホシ」と仰せられてある。

「共存」は共に存在するの義、相依り相助けあつて生を保つことをいふのである。

「誼」はギと訓む。人のかくあるべき筋道をいふのである。

「篤クシ」は心を純一にして行ふことである。

忠孝の美風を發揚し博愛共存の誼を厚く行つてと仰せられたのである。

「入リテハ」はわが家に入りてはの義である。

「恭儉」はつつまじやかにほどほどを守ることである。教育勅語には「恭儉己レヲ持シ」と仰せられてある。

「勤敏」は事物を滞ることなくつとめる義である。

「業ニ服シ」は各自の職業に従事することである。

「産ヲ治メ」は生計をよく整へることである。

「出テテハ」はわが家を出でて世に處してはの義である。

「一己ノ」は一身のといふことで自分ひとりの義である。

「利害」の「利」は利益、「害」は不利益、禍をいふのである。

「偏セス」はかたよらないことである。

「公益」は公共の利益、即ち社會國家のためになることを指すのである。

「世務」は世の中の務め、即ち社會國家のためになる仕事を措すのである。教育勅語には「公益ヲ廣メ世務ヲ開キ」と仰せられてある。

「竭シ」はあるだけのものを悉く出すことである。

一個人としては恭儉に勤敏に自己の業務に従つて生計を整へ、社會人としては自己の損得ばかり考へないで公益のため世務

のために力を盡してと仰せられたのである。

「以テ」は「教育ノ淵源ヲ崇ヒテ……カヲ公益世務ニ竭シ」をうけるのである。

「民族」はわが國家を組織してゐる全民族のことである。

「安榮」は安らかに榮えることである。

「社會の福祉」は社會のさいはひといふことである。

かくして國家の興隆と民族の安榮と社會の福祉とを圖るべきであると仰せられたのである。國家の興隆、民族の安榮、社會の福祉の三者は同一物を三つの方面から見たものと考ふべきであらう。

朕ハ臣民ノ協翼ニ頼リテ彌々國本ヲ固クシ以テ大業ヲ恢弘セムコトヲ冀フ爾臣民其レ之ヲ勉メヨ

「協翼」の「協」は協賛の協、あはすことである。「翼」は鳥の羽翼ある如く本體を助くる意。「協翼」は臣民の心を合せて聖旨を體して助け奉ることである。

「頼リテ」はヨリテと訓む。たよりとしたまふことである。

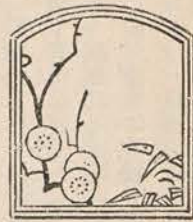
「大業」は大いなる事業の義である。

「恢弘」の「恢」は大、「弘」はひろむ。「恢弘」は益々推しひろめて大いに盛んにすることである。神武天皇の詔には

「天業ヲ恢弘ヘテ天下ニ光宅ル」と仰せられてある。

「爾臣民」はわれら國民に向いて「汝等臣民よ」と親しく御呼びかけになつたのである。

臣民の協翼にたよつて彌々國の基礎を鞏固なものとなして皇祖宗帝より繼承せる大業を恢弘せんことを冀ふ。汝等臣民之を つとめよと仰せられたのである。現今時局極めて重大、國民たるもの死力を盡して奉公の誠をいたし、以て優渥なる聖旨に對へ奉るべきである。



非常時特輯

論說

現時局に對する吾人の覺悟

五年 大森 徳 三

今や我が帝國は内に、外に、多事多難なる所謂非常時局に實際して居るのである。内に於ては即ち財政の窮乏思想の惡化に惱まれ、外に於ては即ち民國を初め米・英・露等に對する外交方面に於て困難を來してゐるのである。

日支關係は宜しきを得ず、竟に我が國をして國際聯盟を脱退するの措置を採らしむるに至り、總て我が帝國の對外關係を益々急迫ならしめんとして居る。之は實に民國國民の我が國に對する認識不足に起因して居るのではなからうか？滿洲事變及び上海事變は其の表面に現出された最大なるものと言ふべきである。又英國とは經濟方面に於て問題を惹起して居る。國際聯盟脱退の効力發生の一九三五年及びロンドン條約滿期の一九三六年、即ち我が昭和十年、十一年に於て我帝國

否世界は如何に展開する事であらうか？又此の一九三五・六年を目ざして居るかか如き支那に於ける三箇年計畫、或は露國の第二次五箇年計畫、或は米國に於ける建艦等深く考へ至れば實に戰慄に堪へない次第である。現に露國は傳統的政策を發揮して極東に兵力を集中し、浦鹽斯德には潜水艦を浮べ飛行場を設置して萬一に備へてゐる。殊に今日に於ける米露の關係は我が國民にとつて注目し得るものである。又ロンドン條約滿期前後に於て、次の軍備縮少會議が必ず開催されるであらうが、之は成立し得ざるものと觀測されてゐる。

是に於て我が帝國は古今未曾有の大國難に遭遇するのではないか。或は幸ならずして露・支兩國を陸に、米・英兩國を海に、向ふに廻して交戦を余儀なくさせられるかも知れない萬が一是に至れば、我が國民は如何に爲すべきか？日清・日露の役の比ではない。我が陸軍、海軍は逸早く出動して敵の陸海軍に當り必ず勝利を得るであらうし、又必ず勝利を得なければならぬ。日頃のあの猛訓練に加ふるに日本魂を以てす

れば我が軍の向ふ處敵なしであらう。然し現今に於ける戦争は昔時に於ける其れと趣を異にしてゐる。即ち今後の戦争は只第一線に於てのみ害を被るものとは限定し得られない。敵の飛行機襲來に依り國內到る處に危害を及される事は判然として居る。こゝに爆彈投下、毒ガスマ襲來の憂が存する。故に第一線に於て勝利に次ぐに勝利を以てするも、其の本國が崩壞に歸すれば、則ち彈藥、糧食の供給が斷絶して、結局最後の勝利を獲得し得ざる事は今更深き思考を要しないのである。是に至つて帝國の破壊、民族の衰微が到來する。換言すれば科學文明の發達の結果航空機の發明進展を齎し、戰闘上に一大變化を起さしめたのである。此の事は彼の歐洲大戰に於て明確に證明された。乃ち爾後の戦争に於て我等は惟軍人にのみ恃んで居てはならない。軍人に何等の憂心を懷しめず之を第一線に送り出し、銃後に於て完全に國土の保全を計らねばならぬ。國土の保全は第一線に立たない者の當然の義務であらう。國土保全と云へば第一に敵機に對する防禦を意味する。一般國民としては消極的に自ら敵の飛行機襲來に依る危害を防ぐ事が必要である。即ち燈火管制・遮蔽・防毒・消火等である。積極的の軍隊の對空行動の必要は今更言を待たない。是に於て我等は帝國臣民としての最全を盡す覺悟がなければならぬ。一旦緩急あれば身を挺して祖國に奉ずる心は我が帝國民として誰しも有して居るのである。然し今日に於ては

一旦緩急あれば、一では鈍に過ぎる。盗人を捕へてから繩をなふて居ては用を辨じない。敵機が頭上に到來してから燈火を消して居ては難を免れない。乃ち我等は不斷の訓練修養が肝要である。後日の戦争に於ては、只一個人の細なる不注意に因り燈火管制の効を奏し得ず、大害を招く事も有り得る事である。故に我等帝國民は各々此大國難打開は我が一身の雙肩に在り、との決意の下に國家の現状、時勢の變遷に此細の注意を拂ひ、目前の目的に全精神を集中し、弓に於ける弦の如き張りきつた、實のある生活を送り、以て後日の萬一の大國難に資せねばならぬ。

要するに、此の豫想せられた大國難を近き將來に懐ける我が帝國臣民は、浮華放縱、輕佻詭激の念を斷ち、實質剛健の氣を涵養し、以て内部的の財政思想方面の難を避け、各自其の現在に於ける職分を全うし、恰も兵士の戰場に於ける氣分の如き充實して空なき生活を爲し、一朝有事の際には協心戮力して、我が帝國民の前途に永遠性、光明性、發展性を保有せしめ、國家を永久の安きに置かなければならない。

非常時に直面して

五年 森 彌市郎

我が國近來の非常時的なる不景氣は何によつて起つたかと

云へば國內では急速的なる人口の増加それに資源は少なく國外でも世界大戰後會て無き不況が各國を襲つたからです。

故に我等農家では既に星を戴きて野に出て夕に星をいたゞいては吾が家に歸ると云ふ生活でありながら非常に窮乏したと云ふ事は誠に遺憾に堪へない次第であり且つ又悲しききほみであります。

扱て學びの道に奮勵してゐる吾等は如何にして此の非常時に處すべきか。

若き吾等は中絶したることなき二千六百年の民族生活を有し而も今だ一度も老境に入らず榮華の絶頂に立つ事なく常にある遠い未來を望みつゝ、明日のために營々として勞役し來たつたのである。

われ等の祖先は建國この方外來思想の影響を受けるまでは何等の空虚なる哲學も有たず何等絢爛なる言論も裝飾されたる宗教も持たなかつたけれども又この日本民族には純乎たる理想と澁潤たる眞劍的なる實行とが太く貫いてゐた。

それは吾等の姿であり吾等の力である。

この純とこの眞劍とが實に今日の日本民族の躍進國家の生々發展の原動力となつて日本に於てのみ東洋文明の華をかざし得た所以のものである。

國家は歴史を外にして生命なし神武以來二千六百年根本的に國家を改造した大化の改新を見よ。

豪族階級を打破して貴族政治を撤廢し貴族、豪族に隸屬したる天下の私民を擧げて國家の公民としその占有に屬したる土地を悉く沒收してこれを國家の所有とし四民平等の理想の上に新國家新社會を建設したその偉業の中心人物たるや中大兄皇子、藤原鎌足それは二十歳二十六歳の青年ではなかつたか、紀元千九百年歐亞を席捲した勢に乗じてその狂暴なる觸手を吾が日本に伸べやうとして高麗王の手を経て吾が國を辱しめんとした元の忽必烈の使者を敢然として斬り十萬の蒙古兵を玄海のもくづとなして内には日本國民の自覺と勇猛心とを奮ひ立たしめ外には一指だも染め能はぬ事を思ひ知らしめたその英雄的氣魄と實行力の持主は時の執權青年北條時宗であつた。

又思ふに六百七十六年の武家時代の後狂瀾怒濤のあひだに明治維新の基礎は何人の手によつて打ち築かれたか正しく青年であつた青年の力であつた、西郷南州吉田松蔭大久保甲東その他多くの有名無名の青年英雄の意氣と力とが凝つてかゝる偉業が成立したのである。

即ち明治維新と明治時代とを生み出した所のものとは精神的には一つの理想に統一せられんとする青年の欲求をうして實行的にはこの理想を實現せんとする英雄的期待であつた。

その理想とは何かわが日本を偉大なる國家と爲さんとする燃ゆるが如き熱情それであつた、かゝる英雄的氣魄が實に明

治維新を創つた力であつた。

かく考へるに昔より非常時に直面してよくそれを打破して歴史深き國体を保ち得たのは皆然ゆるが如き熱と意氣とを有する青年であつた。

しかし今又對内的に對外的に非常時に直面してこれを破打すべきは吾等青年でなくして、誰れが完成出來やうぞ。

清淨なる理想伸びんとする若き力によつて荆棘を切り開き岩根をこち起して時代を創造する社會が若き吾等青年にかつて改造せらるゝ、時その社會は一代は一代より進歩發達する所である、然る後昭和維新なるものは吾等青年によつて建立せられ非常時は漸次後退するだらう。

尊いかな青年の氣魄讀むべきかな青年の力よ。

吾等の日本は現今暴風雨の中に立ち怒濤の上に乗つてゐる海の内、海の外に思想經濟外交産業の全般に亘るこの暴風雨を猛然と突破し雄々しくも怒濤に駕して新日本の新鮮なる生命を喚び興し理想社會建設への土臺を踏みしめねばならぬ。

それには云ふまでもなく純無垢で正直で大膽で實行力に富む健かなる吾等青年の力に俟つより他に道はなく當然吾等のなすべき使命である。

しかも一步一步双脚でしつかりと大地を踏みしめつゝ、建設してゆく吾等青年たちの隣人との共同動作相力互助の力に依らねばならぬ。

理想の下に邁進せよ

五年 泉 千秋

吾等が生存する此の世界は常に理想の境地に到達せんと努めて居る。此の世界は數十ヶ國に分離し、或る點まで國際協調の實をあげてゐる。しかしその國家的民族的自覺に依り獨特の見解の下に幾多の經驗を積み重ね此の積重ねた經驗の上に、各國が理想とする殿堂を築き上げんとして居るかくして一歩々々理想境へ近づかうとして居る。しかし或時は一國の理想とする所が他國のそれと相反目し、遂に戰爭を惹起し、一方能てこれを遂行せんとし他方は之を阻止せんとする、理想實現の手段とは言へこれを戰爭に移す事は人類道徳の立場から、或は慘酷のそしりもあらう。しかし更に觀地を變へて見れば、争闘の必要性がある。何となれば、正しい事は最後迄正しく、且つ遂には、凱歌を奏するものである。これは吾等が經驗し、歴史を讀む意味は分明々白々な事實である。故に人類間に起る争闘はたとへ武力行爲であらうとも、相手の暴戾に對しては、敢然として、これを行使して一點の間違ひもない。この意味に於ける争闘は少しも排斥批難さるべき理由が無い。此の世界が理想實現に努力してゐる遊星であるから此上に任む者。即ち人間も亦其思想經營に於て一つの理想

山にあれ海にあれ野に在れか、る青年たちの全身全靈の躍動する處そこには理想社會への革新が青年日本の偉大なる建設がめざましく吾等によつて實現されるだらう。

斯く思ふ時吾等は今日の暴風雨の眞中に在つてなほ且つ明白に明日の輝かしい麗日を望見し得且つ又希望の光に胸の高鳴るのを感じないでは居られぬ。

嗚呼斯く考ふれば皇國の興廢は一に吾等若人の決意いかんによるのであるもし此の時吾等がこの重なり重なり來る難關に縮みあがつて建國の大精神國民的使命を忘れて安逸をむさほつてゐたならば、光輝有る三千年の歴史に拭ふ事の出來ない汚點を留め上は皇室に對し奉つて大不忠となり吾等の祖先に對しては大不孝となる。

お、吾等が後には三種の神器が有るぞ！

青年よこの難局を打開しやう力強く行かう。

—完—

が無ければならぬ。若し學術に於いて理想無しとするか、これ徒に智識の擴大に努め、賢い惡魔をつくるのみ。藝術に於て理想無しとするか、これ只技巧の進歩に終るのみ。政治に於て理想有らずとするか、これこそ國家を衰滅に導く原動力でなくして何であらう。宗教に於て理想の無い場合それは一種の阿片に過ぎない。しからは萬物の靈長に於て理想有らずとするか、遺憾ながら本能に生きたる畜生と異なる點がない。その萬物の靈長の中春秋に富み、意氣に溢れ、希望に充ちたる青年にして理想抱かずとするか、かくの如き青年は宜しく速かに老人と共に墓場に影を潜むべし。理想なき妄動者を世界は求めて居らぬ。殊に日本は時局重大である。どうしてかくの如き青年を一日否一瞬だも望んでゐるやうか。

國家を隆興に導くもの、それは青年である。國家を衰亡に陥入れるもの、それは青年である。國家存立の要素は領土、國民、統治權の三つであるが、その國民の中、就中青年こそ極めて重大なる要素である。理想の下に勇往邁進する青年こそ眞の國民であり、國家を双肩に擔ふ最適任者である。國民として、青年として、當然なる義務であるか、國家を隆昌に導き得る事が出來たならば、これ程喜ぶべき事があらうか。これこそ國民が、國家へ盡す最大報仕である。

吾等青年の右手に日本帝國の前途を拓き行く黄金の鍵あり又左手には人類の平和を齎らす白銀の鍵あり。此等の鍵を即

時且つ有効に運用すべき青年にして國禁を犯して煙草をくひらし、或は酒色に微笑む輩が存在するとは何たる事であるか。實に吾等青年一同の一大恥辱である。滿洲の曠野に奮戦する忠勇な我が將兵諸士に對して何の面目があるか。青年を唯一の頼みとする國民に何として此のつぐないをするのか。更に青年をかたじけなくも層一層思召さるゝ、上御一人に對し奉り果して忠義なる國民であり得るか。

「青年を観れば國家の前途を卜知せられる。」とビスマークは云つて居る。吾等は日本の青年として世界に堂々矜持し得る美點があるか。三千年の歴史に育かれた日本魂を歴然と外國に示し得るか。日本を、日本帝國をアジアの盟主より更に世界の王座に据えんとする奮勃たる意氣と崇高なる理想とを、内は國民に示してこれを磐石の安きに置き、外は世界に示して畏敬せしめ得るか。日本魂を口で示せと云ふのでは無い。理想と意氣とを言葉で話せと言ふのではない。口や言葉で表はすのは誰でも出来る。此の魂此の精神をすべての現實に發揮するのだ。吾等は奮勃たる意氣の下に崇高なる理想を毅然として確立し、この理想を俯仰天地に愧ぢざる行動に表示して世を進むべきだ。これが最善の處世の政策である。

世界は今や經濟界に於ては不況の嵐に呻吟し、思想界に於ては、その混沌に苦惱してゐる。しかし經濟界が整頓された曉こそ眞に日本の國難が來るのである。歐米の政界に、經濟

彦中生として

四年 居長賢藏

机をたゝいて「非常時だ」「昭和青年の使命」だのと熱辯をふるふ様なことは止めようではないか。或る程度まではそれが必要かもしれないが、もう既に實行時代に入ったんだから。而も英語と數學に頭を悩してゐる中學生が生半可に誰かに教へて貰つたやうなことを言ふのは一世紀前のことだつた非常時といふことを意識したなら、そんな空論を吐くよりも直ちに實行に移つた方が賢明な遣り方ではなからうか。實際そんな議論は識者に譲らうではないか。

さて實行といふと易しい様でむづかしいもんだが、僕等としては中學生にふさはしい行動をとればよいのだ。「日本非常時に際しての有爲な國士」といふ言葉は度々耳にして來たが、その有爲の國士といふのも具体的にいへば、經驗の少ない中學生には勢ひ平凡な言葉で表はさなくてはならないやうになるのだ。

彦中健兒がどれ程中學生としての職務を盡してゐるか？考へるとお互に物淋しい感じがする(やうだ)。僕もその一人だが、彦中生は一般に運動熱が乏しいのではないか、といつて試験前にはあはて、ノートを開ける程日頃勉強もしないやう

界に絶大なる資本と權利とを把握し、世界を己が手中に收めんとし野心をめぐらしてゐるユダヤ人がある。彼等は其の毒牙を東洋へ東洋へと向けつゝある。——燎原を焼き盡す火の如く。

しかし、太平洋上嚴然として大亞細亞聯盟建設の途を進みつゝある日本は、彼等にとつて此上も無い障害である。「將を射んと欲せば先づ馬を射よ。」彼等は此の手段を使用するのだ。彼等は日本に對して壓迫を加へ、不當の制禦を爲し、遂には日本を經濟的苦境に陥入れ、以つてアジアをヨーロッパ人のアジアとなし、十九世紀の帝國主義の野心を以て臨まんとしてゐる事は明々白々なる事實である。我が國が現今の國狀を指して「非常時」と呼ぶは、かういふ將來に對する準備期だからである。今を逸して國力を培養する好機は無い。機會はそう屢々吾等を訪れるものではない。

此の非常時に青年として遭遇した吾等は一つの重大なる責任を感ずると共に、やがて展開し行く人生が非常に意義あるものなる事を喜ばざるを得ない。吾等の人生を貫通するものは意氣だ希望だ。そして理想の殿堂に吾等自身の成功の光を點せねばならぬ。

吾等の兩手に輝く鍵を忘れてはならぬ。

吾等の眞の楽しみこそ義務の遂行と實現にあるのだ。行け！ 進め！ 前進だ！！

だ。あちらにもつかずこちらにもつかず所謂徹底的精神のない、それがいけないのだ。最も青年らしくない態度だと思ふ青年らしくあれといふとすぐ亂暴と、りちがへるではないか。ガラスや机壁を壊すのがほんとうに男らしいのなら、亂暴とは一体どんなもんか？ 而もそれが純な心からの亂暴なら、亦青年にありがちなこととして容れられるが、邪智の働いた亂暴、しかもそれを責められた時正直になれない、そんな表裏のある心の持主が有爲の國士の卵と言へるもんか。

寄宿舎の窓ガラスを壊したり、植木鉢を割つたり又此の間の武道大會の様に出場から避けたり、日常生活に一つとして男らしさが表れてゐない。それでどどうして縣下の一中と言ひ得ようか。

且生徒間の情はゼロである。下級生にも不遜な態度があるに違ひないが、上級生は無意味に下級生を撲る場合が多い、撲らない迄も壓迫する。僕はよくいはれるスピリットの存在を見つけるのに苦しんでゐるのだ。而も壓迫せられた下級生は上級に進むと好んでにくまれ役となる。これが彦中の傳統だ。我等は彦中生として彦中自身を斯く反省する時、實に良心に恥づべき事が数々である。

我等が彦中生として眞に國家の非常時を悟り、將來國家に殉せんとするなら、無益な論を捨て、先づ手近な短所を改善し、その道に精進するのが忠誠な國民として又忠實な中學生

生として最も有意義なことではあるまいか。

勿論、世に通じ社會を極めて置くことは必要だが、中學生として下地も出来てゐないのに徒らに議論を辯ずるのは大膽な無謀であり、それでゐるべき忠義な國民だと自ら委ぬるのは愚の至りである。眞に君を念ひ國を思ふ士は實行に重きをおくに違ひない。

日本は非常時に入つた、一昔以前に戦はされた議論が現實化した以上は國民は現實に力を盡さねばならぬと共に我等は彦中生として遠山を望むよりも學の道に第一步を踏み出さねばならぬ。(元)

國民精神作興詔書煥發 十週年を迎へ奉りて

四年 西島輝夫

昭和八年十一月十日は長くも先帝陛下が國民精神作興に關する詔書をお下し遊ばされてより滿十週年に當る佳日でありまして、時恰も我國は所謂非常の時艱に遭遇して居り誠に意義深い感があるのであります。

此の佳日に當り翻つて我が國の現状を見まするに、對外的に、將又對内的に幾多の文字通りの難局に際遇して居るのであります。嘗つては世界に其の存在すら認められてゐなかつ

等が同胞を以ては無いではありませんか。而るに此れ僅りではありません。思想上は於ては怪しからぬ外來思想にかぶれ、我が歴史ある、光輝ある國体を穢さんとしてゐる等實に心外の至りであります。又經濟上に於ても、世界各國が不景氣になれば、各國は急に自國主義をとり、我が商品が世界各地の市場に溢れ出ると、世界各國人は擧つて、やれ日貨排斥だの何だのと騒ぎ廻つてゐるではありませんか。加之、英國は日印通商條約を本年四月十日は破棄すると言明するに至つた。而して今開かれてゐるシムラ會商は如何に進展するかは吾人の想像を許さない處であります。

而して又爲替變動は一國の他國に對する競争力を、目まぐるしく變へてゐます。そして現今の經濟状態は一種の戰時状態で、日本の經濟線に何時、何處から敵の攻撃があるか全く一刻も目を放す事の出来ない状態に陥つてゐるのであります。又現在農村の窮状を見た時、瑞穂の國と云はれる我が日本の根本ともなるべき農村の慘めな近年の狀態を見た時、お、我等は何んぞ安閑として、居られようぞ。まして國家の中堅ともなるべき我等青年は。

我等が九千萬同胞よ徒らに西洋文明に耽溺する事勿れ。而も稍もすれば都會人は多く輕佻浮薄に流れ勝なものであります。詔書の中に「國家興隆ノ本ハ國民精神ノ剛健ニ在リ」と仰

た東亞の一小島國我が日本が、明治維新より短時日にして歐米の諸國を凌駕し、斷然世界の一等國としての地位を獲得するに至つたのであります。世界各國が等しく、我が日本が如何にして、斯くも短時日に斯くも大なる業を成就したかに付いて驚嘆の眼を以つて見て居るが、私はそれに對し、そは我が大和民族が二千年來傳統の大和魂を持つてゐるからである

と答へて、敢て過言で無いと信するのであります。大和魂こそは世界の優秀民族である我等同胞が、世界に誇り得るもの、一つであります。然るに現代青年の中には、或は此の大和魂を持つてゐないかの如き行動をとる者が漸次増加して來たといふ事は、誠に愁ふべき事柄であります。

又勝者の蔭には敗者あり、成功者の裏には必ず失敗者があ

る事は免れないのであります。と同様に我が日本が世界を凌駕すればする程、世界各國からの嫉妬の視線や、反對の視線を受けざるを得なくなるのであります。今や世界各國は眞の我日本を諒解せず、日支問題を初め、あの聯盟脱退當時の如く愈々我が國に對し露骨に眞正面より衝突かんとしてゐるのであります。而して今米國と露國との間に國交が回復されんとしてゐるのであります。斯くして今や我が國を圍む太平洋沿岸の三箇國、即ち米露支は手を握り合はんとしてゐるのであります。目覺めよ同胞！ 最後迄に我等が頼りとするは唯九千萬我

せられてある通り、國民の精神の剛健なる時は國威が大いに發揚せられて居るといふ事實は歴史が最も如實に物語つてゐます。

今や我が國の最も關心を持つ、即ち我が國の正式に聯盟を脱退する年一九三五年を目睫の間に控へ、複雑にして多岐な世界現勢の變轉、まことに端倪を許さない時機に當り、我等同胞は眞の非常時の意義を認識し、浮華放縱を斥けて實實剛健に趨き、詔書の御主旨に負かざる様、而して萬分の一たりとも國家の爲に盡力すべく努力せねばならぬ。

國家非常時にあたり 日本青年に檄す

四年 細野徳太郎

現今我が國は國家非常時が叫ばれ、我國民にして此の語を口にせざる者絶無の状態にある併しながら一面此の語の眞の意味即ち軍事經濟外交思想の各般にわたるこの非常時の實状を自覺してゐる者が果して幾人あらうか。徒らに大言壯語を吐くのみにて、浮華輕佻に陥つてゐる青年の何と多い事であらう。古今未曾有の危急存亡の秋に置かれてゐる我國を背負つて立ち、神國日本をして世界に君臨せしめる大使命は一に

我等青年にか、つてゐるのではないか。新興日本は濶濶たる日本青年によつて育まれるべきである。然るに我國の現状はどうだ。七十、八十の老人をして國家の第一線に立つ事を強ひてゐるではないか。此れ昭和青年の無力を物語つて餘りあるものである。

今や我等は躊躇してゐる時ではない。立て!! 若人よ!! 健國の精神と愛國の熱情を以て。三十五、六年の危険線は一日は一日と近づいてゐるのだ。今にして我等一日の惰眠を貪らんか。忽ち神聖なるべき我國土は夷狄の蹂躪に委ねられるのである。皇國は今や孤立に陥つてゐるのだ。我等の前には最早左傾思想もフアツシズムもない。唯我は大和民族性に生くるの道あるのみだ。諸君よ!! 一致團結以て三千年の名譽ある歴史を一段と輝かせるために、上に彌榮えまます皇室を載き、この難局に突進せうではないか。進軍ラツパは高らかに鳴り響いてゐる。

非常時日本と我等の覺悟

三 年 安 藤 權 一

折しも超特急「燕」が 轟々と走つて來た。軌道は我が大動脈である。機關車の車輪は、毎日々々目ぐるましく回轉しながら、西に東に國家の大動脈の上を爆進して行く。私はそ

つて、我が權益擁護の爲に忠勇なる皇軍は、酷暑或は嚴寒の滿洲を縦横に馳驅して、暴戻極まる匪賊を一氣に打ち破つた。然るに一方上海に於て支那の排日熱となり、益々尖鋭化して我が海軍陸戦隊は支那軍と衝突し、次いで我が陸軍も派遣するの止むを得ざる状態となり、寡兵よく大軍を制して支那軍を大いに撃破し、世界の人々を驚歎せしめたのであつた。

かやうな皇軍の幾多の犠牲に依つて、滿洲には平和の光輝き始め、不法な支那より離れて、遂に滿洲國は獨立を世界に宣言し、極東の地圖を一變せしめ、王道樂土の明朗濶利たる新興國は、三千万民衆の歡喜の裡に誕生したのである。然しながら列國は日本を侵略國となし、國際聯盟會議に於て、我が堂々たる正義の主張は容れられず、遂に四十二對一といふ名譽ある孤立に陥り、我が外交上歴史的な聯盟脱退は敢行されたのであつた。實に滿洲事變突發以來、我が外交は今迄の追隨外交をかなぐり捨て、自主的外交政策の遂行となつた。軍部は奮然として愈々以て我が權益守護の爲に立つたのである。又此の事變は我が國民をいたく刺戟して國防に目覺めしめ、内外共に重大なる危局を強く意識せしめたのである。一方國內に於ては、國民の思想悪化し、財政は行き詰り、農村は疲弊し、第二の國難の來るのを告げて居る。實際今日の日本は内憂外患交々たるの國家非常時に直面して居るのである。眼を世界に轉せば、我が聯盟脱退に次いで獨逸が脱退し、軍縮

れを見送つて、ふと七十年前の日本を思ひ起した。七十年前の日本。其の頃の日本には未だ汽車といふものもなかつたのだ。電車飛行機は勿論無かつた。駕籠で十幾日もか、つてやつと江戸へ着けた東海道を、現に「燕」は八時間半で突破して行く。又旅客飛行機は約二時間半で飛翔する。明治初年から現在を見る時、日本は運輸・通信の機關の點ばかりでない殆ど總べての軍事も教育も、産業・貿易も振はず、人口は少く、全く野蠻國の様であつた。それが七十年の歳月を経た、今日、人口は一億人に垂とし、政治・軍事・交通の諸機關は完備し、領土は廣大になり、産業は發達し、貿易は旺盛になり、あらゆる我が商品は、關稅壁を乗り越えて洪水の如く全世界に滿ち、列國はその食止めに汲々たる有様である。又日清日露の兩役に大勝し、世界大戰に参加した我國は、世界各國の驚異を尻目に五大強國の一に入り、次いで三大強國の一といふ世界的日本となり、その大躍進振りには正に旭日昇天の勢である。此の現實が非常時を生んで、日本は今國際嫉視の中にあり、その壓迫の下に居る。かう思ふと、現今の我國の非常時は、滅亡の途にある非常時でなく、向上大發展の途上にある非常時なのである。

非常時日本! 今や全國津々浦々非常時の聲で滿ちて居る。何故に非常時と呼ばれる様になつたのであらうか。昭和六年九月十八日、一支那兵が滿鐵線路を爆破したのが導火線とな

會議は停頓し、着々兵備を整へ、建艦競争は再び起らんとし世界を擧げて緊張し殺氣が漲つて居る。見よ、東方を。遙か太平洋の彼方には、世界一の海軍を集中して、西方の日本を注視して居るではないか。轉じて見よ。黒龍江の北岸には、大軍を集結し防備を整へて、我を窺つて居るではないか。かくて南方の南洋と、北方の滿蒙はどこまでも吾等の生命線である若しも此の二生命線が侵されたら、それは帝國死活の大問題である。椰子の樹が茂れる處、其處は海軍の第一線だ。赤い夕陽が廣大な平原に沈む處、其處は陸軍の第一線だ。資源極めて豊富な此の二生命線は、我が日本の軍事・經濟・産業上重要な所である。我々は此の海の生命線南洋と、陸の生命線滿蒙とを堅く守らねばならぬのだ。東洋に我が國が嚴然と存在する以上、世界の平和、延いては世界人類の幸福が何時迄も保たれる。然し息詰る様な此の時、何時最悪の場合に陥らぬとも限らない。萬一最悪の場合に陥つて、我が海軍の艦隊が軍艦旗を橋頭高く掲げ、威風堂々太平洋の黒潮を蹴つて東へ進む時、或は我が精銳な陸軍が軍旗を先頭に、滿洲の廣野を肅々と北へし進軍せる時、或は我が勇敢な空軍が、日の丸の銀翼を連ねて、或は太平洋に、或は滿洲の空目指して飛翔して行く時、我等は老若男女を問はず敢然と立たねばならぬ時、國家總動員して假令全國土が焦土化しても、全國民が一人残らず悉く屍を曝すとしても、三千年來の光輝

ある歴史を有する此の神州の地を、死守せねばならぬのだ。「海行かば水つく屍、山行かば草むす屍。」の覺悟を持つて第一線に立つ軍人も、國內にあつて銃後を守る國民も互に協力一致祖國の爲皇國の爲、仇なす敵を斷然膺懲せねばならぬのである。

現今日本の國際的の最大の危機と稱せられて居る一千九百三十五、三十六年は、丁度我等の世に立つ時代だ。我等の活躍する時なのだ。此の點を想望すると、此の危機を切り抜ける大きな任務は、一に我等の双肩にかゝつて居る。實に我等の責務は重、且大と言はねばならぬ。我等が之を思ふ時、寸刻もつか／＼としては居られぬ。刻下の日常の準備が大切である。我等は他から辱しめを受けた場合、之に對抗するだけの否、それ以上の實力を充分に平素に養つておいて、萬一の場合の備へにしなければならぬ。それ故にいくら軍事費が激増して、國家の費用が膨大になつても、敢て恐るゝどころか我々としては陸軍の資材整備、海軍の第二次補充計畫さへその豫定の通りに行はれんことを切望するものである。我等は決して軍備を整へて侵略するものではない。我が大和民族は平和を愛好する民族である。世界の平和を維持せんが爲に、人類の幸福を保たんが爲に軍備を充實するのである。

内外共に危機迫れる今日、非常時日本の現狀をよく諒解して、我々は大きな決心の臍を固める必要があるのだ。新日本

る處に潜在して居る。世界は一大火藥庫である。其の一隅に與へられた、極く小さな衝撃も終には全世界を、震撼させる程の大爆發になるであらうことは想像に難くない。

然して其の時機に最大難關に會ふのは日本である。我國は先づ陸軍ではかの六十九萬の兵士(平時)、二千餘機の軍用機、加ふるに數千臺の戰車及び化學戰隊を有する、強大な赤衛軍に打ち勝たねばならない。

米國とは、殆んど私の二倍の兵力を有し、且つ二千六百の空軍を有する米海軍を破る力を持たねばならぬ。

加之つい近日、米露間の國交は復活したではないか。故に我等若し戰ふ時は六十八萬の陸軍を粉碎し、私の二倍に恒する大艦隊を太平洋の藻屑と化さしめずば、勝つ事を得ぬのである。然るに最も重要な空軍は如何に。彼等二國を合すれば實に四千六百の空軍、是に對し我は僅に千五百機である。

民間飛行機数は彼の一萬餘機に對し、私の百五十機、而も性能に於ては我國は斷然劣つて居るではないか。最悪の場合即ち英米露支聯合軍を敵に廻した時の事を考へて見よ。

二百六十餘萬の敵陸軍、私の三倍餘の敵の艦隊、空を蔽うて迫り来る六千餘機の空軍、この大敵に果してよく勝ち得るであらうか。而も國際關係は日に日に悪化する一方である。

日ならずして全世界を搖るがす、大戦亂が勃發するや否やは計り知れぬ状態である。若し戰有りとなせば、その導火線は

の學生は舊來の學生とは根本的に違ふ。單なる學生ではない興國の礎石たるに甘んじようとする愛國學生である。既にその心的態度が國家非常的だ。日々の學習にも訓練にも、祖國愛の精神で着色されて居る。起きるも眠るも力むるも、魂が常に國家と一つに結ばれて居る。眞劍さの満ちた、奮闘精進の生活と化して居るのである。又居なければならぬのである

現代我國の情勢と我等の覺悟

三年 林 秀夫

今や我國は、滿洲事變以來、非常な國際危機に、面して居る。このことは、日本人である限り、何人も首肯し得ることである。即ちこれがため、先に國際聯盟を脱退し、支那と背き、東洋に於ては、全く孤立の状態となつた。全世界を、敵としたかの觀がある。たゞ日本に、好意を寄せる國があれば、シヤムか、エチオピアか、取るに足らぬ、弱小國の二三である。それになつた一つの善隣滿洲國も、軍事上、經濟上、まだ充分發達を遂げて居ないから、一旦變時に際しては我國は正に、四面楚歌の状態と、ならざるを得ない。

今や我國と米露英支間との國際關係は、色々の理由で危機に來て居る。世界の情勢として戰を誘發すべき原因は、到

恐らく一九三六年の軍縮會議であらう。我日本は、最早五對三の如き比率では斷じて居られない。戰爭は避けたい、然し今の有様では、十中八九戰は到底免れ得ないであらう。

一九三六年は間近に迫つた。若し軍縮會議が決裂したならば世界各國の間には猛烈な軍備擴張の競争が始まるであらう。

あ、かく思ふ時、一九三六年、今から三年後、其の時には我々はもう國家の中堅たる青年だ。我等は出来るだけ、他國に屈せぬ程度で戰を避ける様にすると共に戰時に處する、心懸が必要である。

今は戰こそ無い。けれど、斷じて平時では無い。非常時の色は一般と濃く、いはば戰時と變らない。であるから我々今の青年學生は現實に充分奮闘し努力し、勉勵し、將來政治上に或は軍事上に、活躍す可き基礎を作り、實力の上に、團結の上に、一分時なりと雖も隙を見せはならない。

此の秋に於ける學生の精神の修養、肉體の鍛練は、近く目標を前にした、準戰時の修養であり、鍛練でなければならぬ

この自覺を持ち、國家非常時を確認した日常生活でなければならぬ。現在の學生々活の如何は直ちに日本の前途の國運の如何である。現實が未來を語つて居る。國民の學生の減びる時、誰が減びへの道を奠ふ者があらう。心身二道の修養と一朝時ある時の心がまへが、此の際特に要求せられて居る。我等の覺悟である。努めん哉、勵まんかな。

非常時に際して

二年 的場 峻

太平の洋に逆捲く怒濤。大興安嶺に吹荒ぶ嵐。見よ!!。世は非常時である。何時、如何なることの起るやも計り難い。これ昨今の世相である。高山樗牛曰く、「大いなる戦争の前には恐しい沈黙あり、而して戦争の勝敗は凡てこの沈黙の間になさるゝなり。」と。大いなる沈黙。これ日支事變以前のアジアである。然してその沈黙も終に破れ、今や復讐の氣に燃える赤露、強大なる兵力を以て虎視眈々として、我を狙ひ又自ら太平洋の羈者たらんとして機を窺ふ米の大海軍。加ふるに歐米よりの經濟的壓迫。噫々すべて世は非常時である。

孟子曰く、「天に従ふ者は存し、逆らふものは亡ぶ。」と天に従ふもの、これ「正義」である。日本は正義の國である。されど正義を死守するにはこれに楯つく強者多し。されど強者も正義には敗る。見よ!!我が國を。あの元寇の亂を。更に日清、日露の役を。如何なる強者も正義の前には屈服したてはないか。守るべきはたゞ正義である。

見よ!! 現今のアジア。それは衰微しつゝ、ある大自然である。日本は?それはその大自然の一角、東の果に燦然たる光を放つ救ひの太陽である。皇國日本。實にアジアの盟主であ

る。滿洲國未だ若し、友邦シヤム何ら頼む所なく、况や支那に於てをやである。全アジアの生命は實に皇國日本の上に掛かる噫々使命重大なる哉。正義の日本。

日本には古來大和魂がある。思ふに人皇基を肇めしより今に至る二千五百有餘年の間、皇統連綿として萬世一系の大王を載き、世界無比の歴史を有するはこれ大和魂の然らしむる所である。大和魂たるや何物をも玉碎せず、措くべき、實に大和武士の精華である。今や非常時である。國難にして英雄を懷ふ。今や非常時日本、人材を待望するや切なるものあり起て。日本國民!! 然らずんば再び華の咲く時やあらん。

非常時に直面して

二年 望月 實

風雲急な我が日本。それは國際地位に於て外交方面、軍事經濟あらゆる方面の危機の大暴風が今や我が國を、我大日本帝國をおそひつゝ、あるからだ。

危機の暴風は異様な力を含んで、二年前の秋の初め九月十八日午前二時寒夜の静けさを破る鐵道爆破以來益々勢を強めありとあらゆる困難を我々九千萬國民の上になげかけてゐるではないか!

だから見よ!、外には我が皇軍の決死の奮戦を内には我等

九千萬同胞の祖國愛に燃える心の塊を、昭和維新説を唱へる人、戦争を叫ぶ人々國內は實に國難打開國力發揚の爲の修羅場である更に「一九三六年の國難」——聯想する時何時も若し戦争が起つたならばその相手が如何なる大強國、アメリカ合衆國、ソヴェート聯邦であらうともきつと〳〵勝ち得る自信とそのための大いなる實力を養つて最後まで、香勝つまで戦ふのだ!

嵐の前に我等國民はひとしく奮起して天の下せるこの大試練に臨まうとする時過去の光榮ある歴史に立かへり將來よき防國の士としてよき國力發揚者として等しく國難打開に精進し我が日章旗の如く雄々しく赤誠をこめて日々の課業にいそしみはけまなくてはならぬ。

あゝ風にへんぼんとひるがへる日章旗の下我々の血は燃へたぎる。

「マモレソコク」 「マモレソコク」

小さい拳であらうとも我等祖國を守るために握り堅めたこの拳だ。嵐も風も何するものぞ。一が現實に立ち返つて二年生の非常時は先づ!鉛筆の蕊をしつかり握りしめる事から始めよう。

非常時の二年生

二年 圓城 茂平

非常時! 何と言ふ我等の心を緊張させる言葉だらう。言ふ迄も無く平常と違ふ時だ。そうだ日本こそは今此の非常時に際會して居るのだ。今こそ我等の緊張すべき時だ。現今の非常時に國の中堅者となるべく我々がなまけてゐてはこの大國難を無事突破はどうして望まれよう。いな國が亡びるより仕方がないのだ。考へて見れば現今の非常時日本こそ幾多の強國が目を注いでゐるのだ。いはゆる日本の立場は今非常に苦しいのだ。日本が國際聯盟を脱退してこの方幾多の國が日本に對してどうやかうやと口ばしを入れるのだ。然し正義を本とする日本のやり方に對して文句を言ふ卑怯な敵こそは我がこの尊い正義の方で踏にじらなければならぬ。さうして我國の正義な行動を外つ國に解からせなければならぬ。我等は早や中學二年である。だから物のわかまへも充分わかつたものである。いざ我等こそは非常時日本に生まれ來て此の國難をしよつて立たなければならぬ國民である。さうして僕等の力でもつてます〳〵國の威光を外國に示しあはせて國の隆昌をはからなければならぬ。我等はわすれてならない。あの露